

# 群馬県立土屋文明記念文学館 移動展の展示内容

(2019年度－1)

展示名	展示内容	区分	資料サイズ・点数	備考
A「夢みる女性誌」	<p>明治17年に日本初の女性誌『女学新誌』が創刊されましたが、女性のための雑誌というよりは女性の「教導」を目的としたものでした。その後、就学率の向上、雑誌の商業誌化が進み、生活誌、少女雑誌が登場します。</p> <p>本展では、明治から昭和30年代までの女性誌の変遷を通じて、女性誌のあり方、求められた女性の生き方などを紹介します。</p>	博物館および博物館相当施設等向き (文学館・資料館 図書館・公民館 など)	<ul style="list-style-type: none"> <li>雑誌と付録242点</li> <li>パネル、バナー A3～B5判42点</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>※コーナーごとの分割展示も可。</li> <li>※学校・図書館等については応相談。</li> </ul>
B「ぐんま文学の森」	<p>群馬県は、詩・短歌・俳句・小説など、ジャンルを問わず優れた文学者が生まれ、育ち、生活した土地柄です。また、豊かな自然に恵まれ、古くから多くの文学者が訪れて優れた作品を残しました。</p> <p>本展では、明治から現代までの群馬ゆかりの文学者100余名を、書籍や雑誌等の資料とともに紹介します。</p>	同上	<ul style="list-style-type: none"> <li>約150点</li> </ul>	
C「紙芝居」	<p>紙芝居は、昭和5年頃に「黄金バット」「鞍馬天狗」などの街頭紙芝居として登場した日本特有の文化財です。本展では、紙芝居のルーツを辿り、最初期の街頭紙芝居から教育紙芝居、外国人向け紙芝居など様々な紙芝居とその歴史を紹介するとともに、メディアとしての役割や戦時下の規制・検閲などについても明らかにしていきます。</p>	同上	<ul style="list-style-type: none"> <li>約100点</li> </ul>	
D「群馬の詩人」 ※パネルのみも可	<p>群馬県は、多くの近代詩人を輩出した土地柄として全国に知られています。本展では、湯浅半月、萩原朔太郎、大手拓次、山村暮鳥、萩原恭次郎ら51人の詩人について紹介します。</p>	<p>同上</p> <p>※パネルのみの展示は一般施設向き</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>約100点</li> <li>51人×2枚</li> <li>パネル100cm×90cm</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>※パネルのみの人物作品紹介、選択展示も可。</li> </ul>
E「風の詩人」 伊藤信吉	<p>伊藤信吉(1906-2002)は、前橋に生まれ89歳で当館開館時館長に就任しました。萩原朔太郎や室生犀星に師事。『島崎藤村の文学』を皮切りに近代文学の評論で地歩を固め、多くの全集編纂にも携わり、現代の文学に大きな影響を与え続けています。晩年になっても旺盛な文筆活動を展開した伊藤信吉について3つのコーナーに分け、紹介します。</p>	博物館および博物館相当施設等向き (文学館・資料館 図書館・公民館 など)	<ul style="list-style-type: none"> <li>約200点</li> <li>「上州は風の文学」約90点、「評論家伊藤信吉」約60点、「郷土を愛して」約60点。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>※コーナーごとの分割展示も可。</li> </ul>
F「山村暮鳥 真実に生きようとするもの」	<p>「いちめんのなのはな」のフレーズを繰り返す「風景 純銀もざいく」や「おうい、雲よ」と呼びかける「雲」の詩などで知られる詩人・山村暮鳥(1884-1924)は、現在の群馬県高崎市に生まれました。キリスト教伝道師となって各地に赴任しますが、若くして結核を患い、最後は茨城県の大洗町で亡くなります。病と貧困に苦しみながらも、真実に生きることを求め続けた山村暮鳥について、その生い立ちから没後までを紹介します。</p>	同上	<ul style="list-style-type: none"> <li>約120点</li> </ul>	
G「方言の豊穡、文学の実感」	<p>日本には全国各地に生活と密着した個性豊かな方言があります。本展では方言の歴史を辿るとともに、文学作品に表れた方言に焦点を当て、作家と方言の関わりや、方言がどのようにその作品に効果をもたらしているかなどを紹介します。特に、方言について造詣の深かった、詩人で評論家の伊藤信吉の作品を中心に、方言が織りなす文学世界の魅力に迫ります。</p>	同上	<ul style="list-style-type: none"> <li>約100点</li> </ul>	

# 群馬県立土屋文明記念文学館 移動展の展示内容

(2019年度－2)

展示名	展示内容	区分	資料サイズ・点数	備考
H 「詩人 大手拓次 孤独の箱のなかから」	群馬県安中市磯部出身の大手拓次（1887-1934）は、大学時代、フランス象徴詩との出会いを経て自らの詩論を確立します。その口語による象徴詩は北原白秋や萩原朔太郎から高く評価されますが、積極的に詩壇と交流を持つことはなく、生前の詩集出版も叶いませんでした。孤独に、そして一途に最上の詩を求め続けたその詩業を紹介します。	博物館および博物館相当施設等向き (文学館・資料館 図書館・公民館 など)	・約100点	
I 「文学者の書一筆に 込められた思い」  <b>New!</b>	平成30年度に開催した企画展「文学者の書一筆に込められた思い」を再構成したものです。文学者それぞれの書への向き合い方や、周囲からの評価などとともに、各人がしたための短歌・俳句等の作品や書簡などを紹介することで、文学者の書の魅力に多面的に迫ります。	同上	・約90点	コーナーごとの 分割展示も可。
J パネル 「いのちのえほん」	平成13年に群馬県で開催された第16回国民文化祭の事業の1つとして詩画集『いのちのえほん』が発行されました。当時の県内盲・聾・養護学校に通う児童・生徒が描いた絵画に、松谷みよ子や永六輔ら著名人が詩やエッセイを寄せ、124点の作品が収録されました。本展では、これら全作品を印刷パネルにして紹介します。	博物館、博物館相当施設および一般 設置向き (学校・ 庁舎ロビー等)	・パネル122点 (解説パネル1点含) ・パネルサイズ 22cm×60cm ・アルミ枠額装済 ・紐付き	※教室や廊下等の 壁面展示に最 適。 ※枚数が多いので 数回に分けて、 展示可。
K パネル 「童謡のふるさと 石原和三郎の世界」	本展では、「うさぎとかめ」「はなさかじじい」などの作詞で知られる勢多郡花輪村（現・みどり市）出身の石原和三郎を取り上げ、その多岐にわたる業績と生涯を豊富な写真と解説文（読みがな付）で紹介します。	同上	・B2パネル19点 ・アルミ枠額装済 ・紐付き	※教室や廊下等の 壁面展示に最 適。
L パネル 「夭折の詩人 長澤延子と中沢清」	17歳と22歳という若さで夭折した群馬県出身の2人の詩人、長澤延子（1932-1949）と中沢清（1932-1956）を取り上げます。昭和20年代に青春を過ごした2人は、それぞれ人生に真剣に向き合い、優れた詩を残しました。本展では、2人の詩と人生を自筆資料（複製）を交えて紹介します。	同上	・B2パネル12点 ・原稿ノートの複製資 料、約30点 ・アルミ枠額装済	同上  ※B2パネル 72.8cm×515cm
M パネル 「襄と八重の上州」	「上毛かるた」でおなじみの新島襄（安中藩出身）とその妻・八重の群馬との関わりや、襄の精神を受け継いで各分野で活躍した人々（湯浅治郎、柏木義円、湯浅半月等）の業績を紹介します。	同上	・B2パネル20点 ・アルミ枠額装済 ・紐付き	同上
N パネル 「文学者の書一筆に込 められた思い」  <b>New!</b>	平成30年度に開催した企画展「文学者の書一筆に込められた思い」図録の一部を再構成し、パネル化しました。文学者それぞれの書への向き合い方や、周囲からの評価などとともに、各人がしたための短歌・俳句等の作品や書簡などを紹介することで、文学者の書の魅力に多面的に迫ります。	同上	・B2パネル25点 ・アルミ枠額装済 ・紐付き	※選択展示も可。